

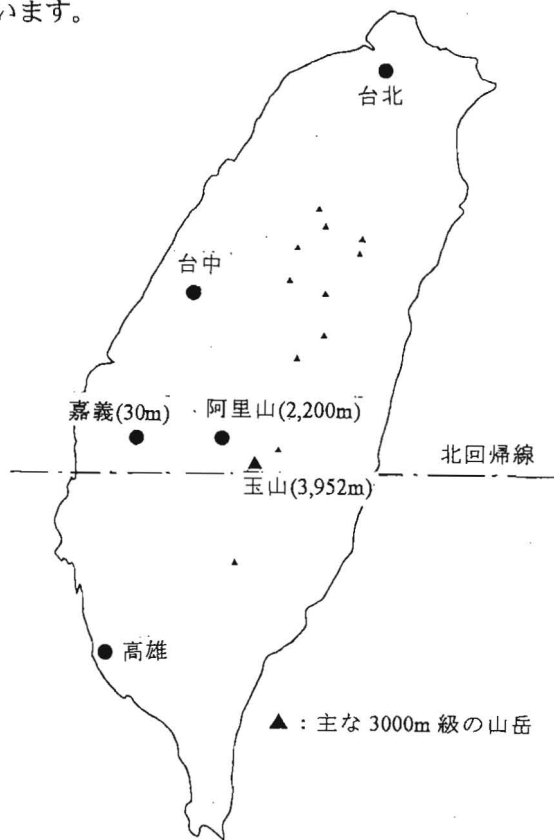
台湾、阿里山のヒノキ林

—林業大学校 20 周年記念事業「台湾のひのきと玉山」に参加して—

はじめに

1999年8月、長野県林業大学校の創立20周年記念事業に参加して、台湾の阿里山^{アリーシャン}でヒノキ林を見ることができましたので、その概要を紹介します。

阿里山は台湾中部の標高2,200mにあり、近くには台湾最高峰の玉山^{ユイシャン} (3,952m) があります。この一角にある祝山^{シュウシャン} (2,450m) からは玉山を望むこともでき、台湾有数の山岳景勝地として知られています。



図：阿里山位置図

台湾のヒノキ

台湾には、ヒノキの仲間が2種類分布しています。一つは台湾ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* subsp. *formosana* 台湾名：扁柏) で、日本のヒノキに極めて近縁です。もう一つはベニヒ (*Chamaecyparis formosensis* 台湾名：紅檜) と呼ばれ、これはヒノキというよりもサワラに近いものです。日本でヒノキやサワラを見分けると



写真1：ベニヒの葉と球果

きには、葉裏の気孔線に注目して区別していますが、台湾で見られた両種にはこうした葉裏の気孔線がはっきりしませんでした。

阿里山の森林

阿里山は、ベニヒが優占して、台湾ヒノキやタブノキ・カエデ・カシなどが混交する森林であったと言われています。今回、胸高直径で2～3m、樹高30mを超えるベニヒの巨木が確認できたことから、昔はこうした巨木が林立する森林であったと考えられました。残念ながら、我々が目にする事が出来た巨木はわずか20本ほどと非常に少なくなっていました。



写真2：ベニヒの巨木群

阿里山の開発と森林の変遷

1985年に日本が台湾を統治したことをきっかけに、日本人が山林の調査に乗り出し、阿里山に千年以上の樹齢を持つヒノキの巨木林が、10万haにわたって成立していることを発見しました。これをきっかけに1912年、山麓の嘉義（標高30m）から阿里山（標高2200m）まで森林鉄道が敷設され、伐採が始まりました。



写真3：伐採されたベニヒの伐根

その結果、現在では千年以上の巨木はほとんど失われ、写真のような伐根ばかりになってしまいました。

とはいえただ伐採しただけではなく、伐採と平行して造林が進められました。現地での植栽試験の結果、初期成長が最も優れていた日本原産のスギ（*Cryptomeria japonica* 台湾名：柳杉）が選ばれ、伐採地に積極的に植えられました。このため、現在では阿里山で最も多く見られる樹種になっています。



写真4：阿里山の森林鉄道とスギ林

現在の森林施業

日本統治時代から阿里山で積極的に植栽したスギでしたが、伐期に達して伐採を始めると大きな問題が発生してきました。成長が早かったために年輪幅が広がってしまい、加えて心材色が黒かったというのです。そこで、外来種から在来種への樹種転換が図られるようになり、近年になって阿里山でもスギを伐採してベニヒに改植する動きが出てきました。

今回見てきたベニヒの人工林はいずれもスギの伐採跡地に造林した林分で、8年生で樹高2.7m（胸高直径5cm）、18年生で樹高10m（胸高直径20cm）でした。



写真5：阿里山のベニヒ人工林（8年生）

終わりに

阿里山周辺の森林はほとんどが国有林で、台湾の林務局が管理しています。阿里山は、入園料を払って森林散策ができるように管理された「森林遊楽区」に指定されており、ベニヒの巨木が見学できる遊歩道がきちんと整備されています。

最後に、今回の調査に協力いただいた台湾林務局及び台湾省林業試験所の方々と、この調査旅行を企画した林業大学関係者、雨の森の中を走り回った調査班の皆様に感謝申し上げます。

（育林部 小山）